

発行／(公財)東京都人権啓発センター

2013  
Spring  
Vol. 57

# TOKYO 人権

●インタビュー／城戸 久枝

**祖国に二度捨てられた人々**

中国残留孤児とその家族の現在を知ってほしい

●特集

**性的少数者の自殺リスク**



# 祖国に 二度捨てられた人々 中国残留孤児と その家族の現在を知ってほしい

き ど ひ さ え  
城戸 久枝さん  
ノンフィクションライター

第二次世界大戦末期の混乱のなか、日本への引き揚げがかなわず、中国に残留を余儀なくされた日本人が数多くいます。その中には、親が命を落としたり、親とはぐれてしまった多くの子どもたちがいました。いわゆる「中国残留孤児」です。戦後、日本と中国の国交がなかったこともあり、日本政府は長きにわたり、残留孤児の問題に目を背けてきました。1972年に国交が回復してからは帰国者も増えましたが、帰国者の苦労や苦悩についてはあまり知られていません。ノンフィクションライターで、中国残留孤児だった父親を持つ城戸久枝さんにお話をうかがいました。

## —お父さんが残留孤児になった経緯は？

残留孤児の方々の背景は、一人ひとりでまったく異なります。それぞれに1冊の本が書けるほどです。  
まんもう  
満蒙開拓団として家族で満州（現在の中国東北地方）へ渡ったケースが多いのですが、私の祖父は満州国軍の軍人でした。祖父は出身地の愛媛で祖母と結婚し、夫婦で満州へわたり、父はそこで生まれたのです。

敗戦間際の1945年8月9日、ソ連軍が国境を越え、満州に侵攻してきた際、父はソ連に程近い勃利<sup>ぼつり</sup>という場所に住んでいました。当時3歳だった父はソ連軍から逃れるため、避難列車に乗ることになったのですが、軍人だった祖父は一緒には逃げられず、祖母は、そのとき腸チフスにかかり意識不明の重体でした。ですから父は知り合いの中国人に抱えられ列車に乗り込んだそうです。しかし、その列車がソ連軍の機銃掃

射にあってしまいました。命からがら茂みに身を隠し、攻撃が終わるのをジッと待っているうちに列車は走り出してしまったのです。父は一緒にいた中国人と共に何日も歩き続け、頭道河子村という小さな村にたどりついたのです。父は、その村に住む子どものいない女性に引き取られ、大切に育てられました。

### —どのように帰国を果たされたのですか。

父が高校3年のとき、交心運動と呼ばれるものがありました。これは、中国共産党にいかにも忠誠を尽くしているかを一人ひとりが発表をするものです。同級生たちに引けを取らぬ発表をした父に、ある同級生が声をかけました。「日本人のくせに、それを隠したまま、共産党に忠誠を尽くすとは、どういうつもりなんだ！」と。そして「日本鬼子」と日本人を侮辱した罵りの言葉を浴びせられたそうです。父は、自分が日本人であることはごく親しい知人以外知らないと思っていたようですし、中国人の両親に育てられ、中国人として生きてきた自負があった父にとって、この出来事は運命の分かれ道になりました。父は、高校に提出していた履歴書の民族名を「漢民族」から「日本民族」へと修正しました。その結果、大学受験では政治審査で二度にわたり不合格となり、教職には就いたものの、「日本国籍」を選んだために、仕事も失ってしまいました。

それを機に、父は日本に手紙を書き始めます。本名も誕生日もわからず日本語も忘れている父にはほとんど手がかりがありません。日本赤十字社宛に中国語でわずかな手がかりを記し、「私の身元を探してください」と手紙を送り続けましたが返事は全く戻ってきません。父が出した手紙は300通を超えました。初めて手紙を出してから8年後の1967年、赤十字社から届いた封書の中に、両親からの手紙が入っていたんです。そのときに父は、両親が生きていること、そして「城戸幹」という自分の名前を知ったのです。

でもその頃、中国では文化大革命があり、出国の許可が出ません。待つこと3年、1970年によく許可が下りて、香港経由で日本に帰国できました。日中国交回復が1972年のことですから、父はその前に帰国したということになります。

### —お父さんの歴史をたどり始めた理由とは？

私が小さかったころ、父は時折、帰国した方と電話で話すことがありましたが、電話で話す中国語が、近所の人に聞かれるのが嫌で、真夏でも家中の窓を閉めてまわったものです。子ども心に父が中国から帰国したことを人に知られたくないと思っていました。

大学3年のときに、父から「中国に行ってみないか？」と言われ大連の地に立ったとき、「ああ、父は

この国で育ったんだな」と感じました。その後、吉林<sup>きつりん</sup>大学に2年間留学しました。その留学の直前に、父から、ダンボール箱を渡されたのです。その中には、日赤宛に父が書いた手紙がありました。すべて中国語ですから、当時の私に、その内容まではわかりませんでした。父の字であることはわかりました。しかし、手紙の最後にあった名前は「城戸幹」ではなく「孫玉福<sup>スンユイフー</sup>」という全く馴染みのない中国名だったんです。その見知らぬ名前を見たときに、私が知らない28年間はそこにはあると実感しました。その28年間は娘の私が書き残さなくてはいけないと思ったんです。そこから、私なりの調査や取材が始まりました。

### —残留孤児の方々が国を訴えた思いとは。

これまでにおよそ2500人の残留孤児が帰国しました。その多くは帰国時には40代、50代になっています。すでに中国で結婚し、子ども、場合によっては孫の世代を連れて帰国する人が大多数です。

ですから普通、「残留孤児二世」というと、中国に取り残された日本人と中国人の間に生まれた人のことを指します。でも、私の場合は、帰国した父が愛媛に



頭道河子村(旧満州、現中国黒竜江省)のそばを流れる牡丹江のほとりに立つ城戸久枝さんと父・城戸幹さん。(2008年11月)

戻り、結婚し、生まれた子どもですから、父も母も日本人なんですね。二世であることに間違いはないのですが、特殊な二世だといえます。

私の父は28歳で帰国し、その後、定時制高校に通いながら、会社員として働き、日本語もきちんと習得し、定年になるまで30余年にわたり働くことができました。ただ、父のようなケースは非常に稀<sup>まれ</sup>なのです。

残留孤児の方々は小学校さえておらず、自分の名前と住所以外は中国語でも文字を書けない人も多いのです。そんな状態で日本へ帰国する人は、働こうにも働けません。日本語を一から学ばなければなりません。仮に仕事に就いたとしても、コミュニケーションがうまくいかず孤立してしまう人が多い。それは残留孤児本人だけではなく、二世や三世にも同様の

ことがいえます。そうしたことから帰国者の7割程度が生活保護に頼らざるをえない状況でした。でも、彼らだって本当は自立したいんです。本当なら生活保護なんて受けたくない。それに関わらず、生活保護に頼らざるをえない状況になってしまったのは、国が早期の帰国支援や生活支援を怠ったせいだというのが、2002年以降各地で提訴された国家賠償請求訴訟の原告団共通の思いだったといえます。

結局は、国が従来よりも拡充した支援策を示すことで、原告は和解しましたが、彼らが最も求めていた“明確な謝罪”はうやむやになった感じはします。生活保護に代わる支援金が出るようになり生活が楽になった人ももちろんいますが、思いを残したままの人もいます。

中国では日本人と蔑まれ、日本では、「日本人なのに、なぜ日本語が話せないんだ」などと言われ、孤立してしまう。結局、祖国に二回捨てられたんですね。“中国で捨てられ、日本に帰国しても捨てられた”というのが残留孤児たちの気持ちですから、その思いに日本政府は応えてくれたのかどうかだと思えます。もっと早く帰国の支援をしてくれたら、そして帰国後、十分な生活支援をしていていたら、今のように日本社会のなかで孤立する状況にならなくて済んだのです。

### —今、直面している課題とは。

残留孤児の方々は、高齢化の問題が深刻になりつつあります。ほとんどがすでに70歳以上です。高齢者向け施設に行っても言葉の壁が邪魔をして、他の入居者とうまくいかないという問題は度々聞きます。そうすると、結局は地域で孤立して老々介護をするようになります。また、一世は日本語がままならないために、病院に行くときなど、子どもや孫に付き添いを頼まざるを得ない。通訳代わりとなる二世や三世が学校を休みがちになるといった問題もあります。

二世や三世について言えば、まず、帰国時の年齢によって状況は大きく異なると思います。20歳を過ぎて、ゼロから日本語を習い始めた人は、一世と同じように、言葉や文化の壁に直面してしまう。一方で、小学生くらいで帰国した人たちは、日本社会には馴染みやすいかもしれませんが、中国語を忘れてしまう。そうすると、家族内でのコミュニケーションが難しくなる。親は日本語を十分に話せませんから、親子なのに、ちょっと込み入った話になると、会話が成立しない。こうした状況は、三世になるとさらに深刻です。一世のおじいちゃんと孫は全く話せないということになります。これは決して珍しいことではありません。

また、こうした問題の他にも、残留孤児そして二世、三世にはネガティブなイメージが常に付いてまわるこ

とも極めて理不尽だと思います。一部の二世らによる“不良グループ”の印象からか、悪いイメージを持たれがちです。歴史的な背景や事実をよく知らないままに批判を受けることもあります。社会になじめず孤立し、仕事につけないのはなぜかを考えてほしいのです。新聞にそのことを寄稿しましたが、書くことで余計に印象づけてしまうのではないかと悩みました。しかし二世の友人に「私たちには書けないけど、あなたが書くことで多くの人に知ってもらいたい」と言われました。

### —「残留孤児」について 知らない世代がいると聞きます。

中国残留孤児が注目されるようになったのは政府が集団訪日調査を始めた1981年以降です。日本へ来て、肉親探しをして、涙の対面を果たす。一定の年齢以上の方の中には、テレビで流れるそうした光景に、感動の涙を流した方もいらっしゃると思います。私が父のことを書いた『あの戦争から遠く離れて』はNHKでドラマ化されて、大きな反響もありました。しかし肉親に出会い、帰国した“その後”が問題なのです。「祖国なのに冷たい」と感じ、日本になじめないで苦しんでいる帰国者の方々のことに関心を寄せてくれる人は少ないのです。

「中国残留孤児」という言葉を知らない世代が増えています。若い世代に知ってもらうことが、私の役目です。若い人たちが、残留孤児のことを話題にしてくれたり、親の世代と話してくれればと思います。決して忘れてはならない問題なのですから。そして帰国者のなかには社会的に成功をおさめた方もたくさんいます。日本と中国どちらの文化も知っていて、どちらでも苦勞をしている帰国者の方々はとても貴重な存在だと思うんです。その「力」を、日中の架け橋を築くうえで有効に活用していけると嬉しいですね。

インタビュー／林 勝一（東京都人権啓発センター 専門員）  
編集／那須 桂  
撮影（表紙・2ページ）／小河原俊男

#### profile



#### ● 城戸久枝（きど ひさえ）

1976年、愛媛県生まれ。ノンフィクションライター。大学在学中に中国の吉林大学へ2年間国費留学。出版社勤務を経て2005年からフリーに。日本生まれの中国残留孤児二世。『あの戦争から遠く離れて—私につながる歴史をたどる旅』（情報センター出版局、2007年／文春文庫、2012年）で第30回講談社ノンフィクション賞、第39回大宅壮一ノンフィクション賞などを受賞。本書は「遥かなる絆」と題してNHKでドラマ化される（2009年、全6回）。その他の著書に『長春発ビエンチャン行—青春各駅停車』（文芸春秋、2011年）がある。



『あの戦争から遠く離れて』  
情報センター出版局 刊  
（文春文庫版も刊行中）



『遥かなる絆 DVD-BOX』  
発行：NHK エンタープライズ  
販売元：ポニーキャニオン

# 作者と読者—他者が歩み寄る場所としての文学 ホームレスの人たちの文芸コンテスト 「路上文学賞」

「路上文学賞」は、現在ホームレス状態にある人、またはその経験者を対象に創設された文学賞です。  
ホームレスの人たちが世に放つ文芸作品は、私たちにどんなことを気付かせてくれるのでしょうか。

“ホームレス”と聞くと、ネガティブなイメージを抱く人が多いかもしれません。しかし、そんな偏った見方を覆すユニークな催しがあります。それが、今年で3回目となる「路上文学賞」。ホームレスの人たちが創作した文芸作品のコンテストです。路上に生きる人々の撮影をライフワークにしている写真家の高松英昭<sup>たかまつひであき</sup>さんと、大江健三郎賞受賞の小説『俺俺』の映画化で注目を集める作家、星野智幸<sup>ほしの ともゆき</sup>さんが、「慈善活動ではなく、誰もが楽しめる“路上の文化祭”をやろう」と共同で企画しました。作品の選考は星野さんがおこない、冊子にまとめ無償配布します。

星野さんはこの文学コンテストを通して、読み手のホームレスの人たちに対する思い込みを壊したいと思っています。

「路上の生活も、いろいろな生活のあり方のひとつだと知ってもらえたら。誰でも、どんな時でも、生活を楽しんで構わないはずだし、その権利がある。どの人の人生も重みは同じですよ」（星野さん）。

ホームレスの人たちは世間の冷たい眼差しを恐れ、いつも他人を気にして生活しています。そのため、相手の期待に応えようとして、過剰に典型的な話をする傾向があるといいます。しかし「自分に誠実に書けば、それが文学になる」と考える星野さんは作品の募集にあたって、他人の目を気にせず自分の言葉で書いてもらうことに一番気を配ったそうです。

2010年に募集した第1回は、30名ほどから100近く作品が寄せられました。2011年の第2回にはさらに増え、中には原稿用紙30枚分もの大作も。それらの作品は、どれも個性的で読んでいて楽しかったと星野さんは話します。たとえば、第2回の文学部門で奨励賞を受賞した作品は、

自信をまつ

たった5文字の作品で、これほど短いものは、なか

なか珍しいかもしれません。

「受け身なのが面白いんですよね。腹が据わりきっていて、むしろこの時点ですでに自信があるんじゃないか？とか、わずかな字数なのに、いろいろなことを考えさせるところがすごい」（星野さん）。

作品をまとめた冊子には、手書き原稿がそのまま掲載されている点も特徴的です。原稿用紙代わりのチラシの裏側から表の柄が透けて見え、書き手の日常が感じられたり、存在しない漢字を新たに発明する人や、書き間違えるたびに訂正印を押す几帳面な人などいて、書き手それぞれの個性が楽しめます。

中には、ホームレスの人たちの間でしか使われない、“路上の業界用語”を用いた作品もあります。こうした言葉は使いすぎると内輪にしか分からないものになってしまう

すが、星野さんは、どの応募作品からも、見知らぬ人へ届いて欲しいという気持ちが感じられたといいます。

「文学は、書き手と読み手が互いに一歩ずつ歩み寄って初めて成り立つもの。その場所は誰のものでもなく、どんな人が来ても良い場所です。だから、“文学”には“路上”が似合うんです」（星野さん）。

個性的で面白い文学作品に触れる気軽さで、作品集を手にとってみませんか。そうすればあなたも、たくさんの人が行き交う路上文化祭の参加者です。

インタビュー／鎌田晋明（東京都人権啓発センター 専門員）  
編集／小松亜子

## ■第3回「路上文学賞」作品募集概要

応募締切 平成25年3月31日 / 受賞作発表 平成25年4月15日  
川柳部門を廃止し、文学部門のみ募集。1人1作品4,000字以内。  
大賞 50,000円（1名）、佳作 5,000円（5名）

■路上文学賞ブログ <http://rojobungakusho-sakuhin.blogspot.jp>

■Facebook内「路上文学賞」公式ページ

<https://www.facebook.com/rojo.bungaku>

※各種お知らせ、作品集の入手についてはこちらをご覧ください。



星野智幸さん



# 性的少数者の自殺リスク

## その背後にある「生きづらさ」とは

性的少数者<sup>\*1</sup>の自殺リスクが高いらしいことは、関係者の間では以前から指摘されていた問題でした。近年、そのことを明らかにする研究結果が報告され、波紋を呼びました。その要因と考えられる性的少数者が抱える「生きづらさ」と、自殺予防について、取材しました。

### 性的少数者のいくつかの「生きづらさ」

性的少数者と呼ばれる人たちの中には、さまざまなタイプの人たちが含まれています。実際にどれくらいいるのか、政府による正式な調査はおこなわれていませんが、海外の複数の調査から、その数が推計されています。

「性同一性障害<sup>\*2</sup>はおおよそ1万人に数人。また、

同性愛者<sup>\*3</sup>・両性愛者<sup>\*4</sup>は人口の約3～5%で、両者を合わせると20人に1人の割合。これは決して“少数”とは言えない数です」(東京都福祉保健局 専門相談員、AGP 同性愛者医療・福祉・教育・カウンセリング専門家会議メンバー 宮島謙介さん)。



東京都福祉保健局専門相談員、AGP (同性愛者医療・福祉・教育・カウンセリング専門家会議) メンバー 宮島謙介さん

性的少数者は、日常的に偏見や蔑視にさらされることが多く、いじめやさまざまな差別を受けやすいのが現状です。

「家族にさえ理解されず、子どもの頃から“オカマ”<sup>\*5</sup>などといじめられ続けることで染み付いてしまう自己否定感。社会に受け入れられていない孤独感…。それに、人生設計を見いだせず、将来に希望を持ってないことも生きづらさの一つです」と語るのは性的少数者の自殺防止といじめ問題に取り組む団体「いのち リスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」事務局の共同代表、明智カイトさん。また、同様のことを、宮島さんも指摘します。



「いのち リスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」事務局 共同代表 明智カイトさん

「生き方の参考となるロールモデルが極端に少ない。人は自分と共通点のある人物を手本にして成長していきます。しかし、それが一般社会の中に見出せない。それなのに、ネガティブな情報は氾濫していて、そうした社会からの刷り込みによってますます生きづらくなってしまう。これは、性的少数者全般に共通した問題です」(宮島さん)。

### 性的少数者は6倍もの自殺リスク

性的少数者の多くは差別を恐れて、自身のことを周囲に打ち明けてはいません。そのため、自殺で亡くなった人が当事者であったことも、動機となった生きづらさも公にはなりません。自殺リスクの高さが認識されにくいのは、この問題が可視化されないことによるのです。

そうした中、日高庸晴氏(宝塚大学看護学部准教授)による、ゲイ<sup>\*6</sup>とバイセクシュアル<sup>\*7</sup>の男性に関する研究は特筆に値するものです。

「それまで性的少数者に関するデータといえば、海

●用語集 ※「セクシュアルマイノリティーズ・インカレネットワーク Rainbow College」作成の冊子より一部抜粋し加筆・編集した。

- \*1 セクシュアル・マイノリティ(性的少数者、性的マイノリティ) [sexual minorities] 世間一般で“正常”とされる性(セックス\*11、ジェンダー\*12、セクシュアリティ\*13)のあり方に当てはまらない人たちの総称。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックス\*14などを含む。
- \*2 性同一性障害 [gender identity disorder] トランスジェンダーで、特定の基準を満たした場合の精神神経医学上の診断名。
- \*3 同性愛者 (\*6と\*8を参照)
- \*4 両性愛者 (\*7を参照)
- \*5 オカマ 「女っぽい男」を指す言葉であるが、そもそもMTF\*16トランスジェンダーとゲイを混同している概念である。歴史的に侮蔑的な使われ方をしてきた。
- \*6 ゲイ [gay] ジェンダーが男で、性的指向\*17が男に向く人。男性同性愛者のこと。
- \*7 バイセクシュアル [bisexual] 性的指向が男女どちらにも向く人。あるいは、同性か異性かということを問わない人。

- \*8 レズビアン [lesbian] ジェンダーが女で、性的指向が女に向く人。女性同性愛者のこと。
- \*9 トランスジェンダー [transgender] セックスによって決められたジェンダーと、自らのジェンダーアイデンティティ\*15が一致しない人の総称。いわゆる身体の性別と心の性別が一致せず違和感を持つこと。あるいは、既存のジェンダーのあり方に疑問を呈し、それを超越 [trans] しようとする人のこと。
- \*10 オネエ 男性が「女性言葉」を使うこと。またはその人。ゲイ男性であるとは限らない。
- \*11 セックス [sex] 生物としてのヒトを「女」と「男」という2つのカテゴリーに分ける生物学的知見。いわゆる「身体の性別」のこと。
- \*12 ジェンダー [gender] 人を「女」と「男」という2つのカテゴリーに分ける社会的文化的な規範、観念。いわゆる「社会的な性別」のこと。
- \*13 セクシュアリティ [sexuality] 人間の多様な性のあり方の総称。

外や病院で集められた事例ばかりでしたが、国内で、しかも病人ではない人たちから統計データを得たことは画期的です」(宮島さん)。

研究からわかったのは、日本のゲイとバイセクシュアルの男性の中には、そうではない男性の約6倍もの自殺未遂経験者がいることでした。

「性的少数者であるがゆえの生きづらさが自殺リスクの要因になっているとすれば、レズビアン<sup>\*8</sup>、バイセクシュアルの女性、トランスジェンダー<sup>\*9</sup>にも同じ傾向があると考えられます」(宮島さん)。

この研究は政府が策定する「自殺総合対策大綱」にも大きな影響を与えました。有識者、議員、「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」ら当事者団体等、大勢の人たちが協力し、この研究を以って各方面へ働きかけた結果、2012年には「性的マイノリティ<sup>\*1</sup>」への対策の必要性が明記されることになりました。これは、いないことにされていた性的少数者の存在をあらためて認めたことを意味します。ただ、大綱はあくまで指針のようなものであり、それだけでは社会は動きません。

「今後は大綱を根拠に、各自治体の具体的な動きを促す活動を続けていこうと思います」(明智さん)。

## まずは「いるかもしれない」と意識して

性的少数者が一定数存在しているということを前提とした取り組みがほとんどおこなわれていないことから、学校教育の現場での対策も急務です。

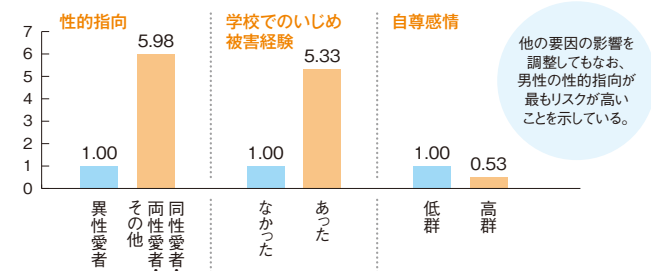
特にいじめ問題は深刻で、“オカマ”ネタで笑いを取ろうとするなど、大人も性的少数者いじめに加担していることに無自覚であるといえます。

「とにかく『いじめないで』と伝えたい。『このクラスにもいるかもしれない』という意識を先生が持つだけで、当事者はとても救われます」(明智さん)。

また、中にはこの問題に取り組んでいる学校もありますが、偏った知識によって当事者側との意識にズレ

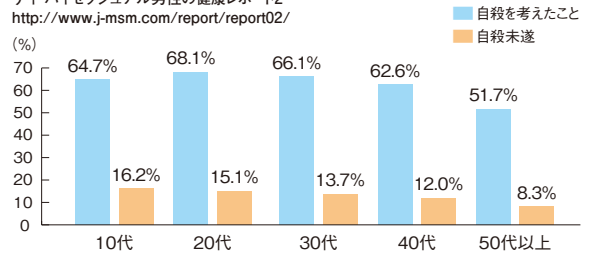
## 男性(1,035人)の自殺未遂に関連する要因

大阪の繁華街での若者男女2,095人を対象にした街頭調査  
Hidaka Y et al (2008) Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan, Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology, 43:752-757  
<http://www.health-issue.jp/suicide/>



## これまでに自殺を考えたこと・自殺未遂

日本人ゲイ・バイセクシュアル男性5,731人を対象としたインターネット調査  
厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業  
ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2  
<http://www.j-msm.com/report/report02/>



が生じているケースもしばしば見られるといえます。

「“オネエ<sup>\*10</sup>キャラ”と性同一性障害しか知らないために、トランスジェンダーと同性愛者を混同していることがよくあります。一人ひとり事情も違うので、本人の話をもっとよく聞くようにしてください」(宮島さん)。

教育現場に限らず、支援や施策をするには当事者の声をもっと聞く必要がありそうです。「かわいそう」という“上から目線”で一方向的に考えても、適切な対策は打ち出せません。当事者を活動に取り込み、むしろ当事者を中心に、それを周りがサポートする協力関係を築いてこそ、これまで公にならなかった当事者の本当の声を汲み取った活動ができるのではないのでしょうか。

インタビュー／鎌田 晋明(東京都人権啓発センター)  
編集／脇田 真也

## 相談先・連絡先

### よりそいホットライン TEL 0120-279-338

どんな人の、どんな悩みに寄り添って、一緒に解決する方法を探します。音声ガイダンスに従い、相談したい内容の番号を選んでください。性別や同性愛に関わるご相談は4番です。 <http://279338.jp/yorisoi/>

### ストップいじめ! ナビ <http://stopijime.jp/>

いじめや嫌がらせから抜け出す方法は、必ずあります。このサイトにはさまざまな方法が載っています。

### AGP (同性愛者医療・福祉・教育・カウンセリング専門家会議)

AGPでは医師、カウンセラーによる無料電話相談をおこなっています。  
TEL 050-5539-0246 <http://www.agp-online.jp/>

AGP「こころの相談」 毎週火曜日 20:00~22:00  
AGP「からだの相談」 第1水曜日 21:00~23:00  
AGP「かぞくの相談」 第2木曜日 20:00~22:00

### いのち リスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン

<http://ameblo.jp/respectwhiteribbon/>

- \* 14 インターセックス(インターセクシュアル) [intersex (intersexual)] セックスが「女」「男」どちらとも断定できない状態、またはその人。外性器など外見からそうだとわかることもあるが、全くわからない場合も多い。従来は半陰陽、間性などと呼ばれた。
- \* 15 ジェンダーアイデンティティ(性別自認、性自認) [gender identity] 自らのジェンダーが「女」「男」どちらだと考えるか。または、どのようでありたいかを示すこと。いわゆる「心の性別」。
- \* 16 MTF、FTM、MTX、FTX [male to female / female to male / male to X / female to X] トランスジェンダーにおける、元の性別と望む性別の示し方。例えば「MTFトランスジェンダー」とは、セックス/ジェンダーが男[male]であるが、ジェンダーアイデンティティが女[female]である人を指す。「X」は、望む性別が男女いずれでもない場合。
- \* 17 性的指向 [sexual orientation] 性愛の対象としてどのような性別の人に惹かれるかということ。意味が異なる「嗜好」や「志向」という語は使用すべきでない。

